

公益財団法人 アメリカ研究振興会 会報

会報

— The American Studies Foundation Bulletin —

第77号

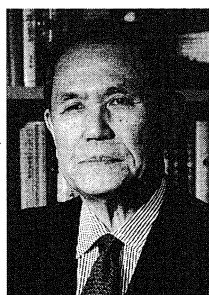
平成29年2月18日

目次

桂・タフト秘密協定の今日性 …………… 松尾文夫 ……1	アメリカ研究図書出版助成規定 …………… 5
アメリカ学会設立50周年記念シンポジウム …… 松本悠子 ……2	平成27年度出版助成図書「自著紹介」 ……………6・7
アメリカ学会50周年記念出版事業助成 …………… 貴堂嘉之 ……2	第10回理事会報告・第11回理事会報告 …………… 8
東京大学附属アメリカ太平洋地域研究センター 資料購入助成 …………… 橋川健竜 ……3	平成27年度事業及び収支計算報告 …………… 9
中・四国アメリカ学会第44回年次大会 …………… 中野博文 ……3	第12回理事会報告、第13回理事会報告、 第6回評議会報告、第7回評議会報告 ……………10
東北アメリカ学会2015年度アメリカ研究公開講座 及び研究会 …………… 牛渡 淳 ……4	助成事業の概要（平成29年度） ……………11
2016年度出版助成図書の決定について …… 油井大三郎 ……4	新しい研究助成制度のお知らせ ……………12
2016年度出版助成決定の過程について …… 油井大三郎 ……4	公益財団法人アメリカ研究振興会 役員 ……………12

桂・タフト秘密協定の今日性

理事 松尾文夫



2015年末の日韓合意で「最終的かつ不可逆的に」決着されたはずの従軍慰安婦問題が、朴大統領に国会から弾劾決議が突きつけられるという韓国内の異例事態のために最終決着とはほど遠い状態となっている。

しかし、今日本に求められているのは、冷静な対応である。そして日本と韓国の上に横たわっている不幸な歴史を今一度とらえ直すことである。すると意外にも、アメリカ、フィリピン、そして中国までも「当事者」として登場する現在の東アジア情勢の生々しい課題が浮かび上がってくる。

日露戦争講和のためポーツマス会議が開かれている最中の1905年7月、フィリピン総督から陸軍長官に栄転、次期大統領への道を歩みだしたウィリアム・タフトが密かに来日、桂太郎首相兼臨時外相と秘密会談を行ない、アメリカが1898年のスペインとの戦争の勝利で得たばかりのフィリピン領有を日本が認めるのと引き換えに、アメリカは日本の韓国での宗主権樹立計画、つまり五年後の韓国併合を承認するという取引を成立させた。第二次日英同盟の交渉を行っていたイギリスも、この秘密

協定を認めた。

私が強調したいのは、このアメリカ、イギリスの承認を得て五年後に実行に移された韓国併合が、その後の満州、そして華北、華南へと進む日本の中国に対する「帝国主義侵略」の出発点となり、やがてアメリカとの戦争開始とその敗北という破局につながる事実が現在の日本ではほとんど忘れられているという現実である。そしてこのアメリカとイギリスは「門戸開放政策」の名の下に、盧溝橋事件までは自らの権益がおかされない限り日本の侵略を黙認してきたという約一世紀前の構図を直視しておかねばならない。

アメリカは韓国の必死の抵抗も無視、さらにフィリピンでは、スペイン統治時代から独立運動を展開してきた「フィリピン革命軍」と、本国から百万を超す米正規軍まで投入して四年間も戦うことになる。反米のみならず、親ロシアの姿勢まで口にするロドリゴ・ドゥテルテ大統領に今アメリカが手を焼く背景には、フィリピン側に戦死者1万6000人を出したこの古い傷跡がある。

韓国の「約束違反」を口にするとき、忘れてはいけないのは桂・タフト秘密協定の存在である。

(ジャーナリスト)